

B-19

乳歯列および永久歯列に部分的無歯症を認めた I 症例について

○伊東彩子、豊村純弘、小笠原榮希、久芳陽一、尾崎正雄、本川 渉

福岡歯科大学小児歯科学講座

小児歯科臨床において、乳歯および永久歯の部分的欠如あるいは完全欠如を認め、その臨床的対応に苦慮することがしばしばある。今回演者らは同一患児の乳歯列および永久歯列に部分的無歯症を認めた症例に遭遇し、長期に歯科的管理を行ったので報告する。

【症例】

患児：3歳1ヵ月の女児。歯の萌出遅延を主訴に来院。

家族歴：両親は血族結婚ではない。

既往歴：出生歴としては、満期正常分娩で出生時体重は3382g、身長は50.5cmで、ほぼ標準であった。また、乳歯萌出時期に遅れがみられた。

現症：

(全身所見) 身長93.9cm、体重14.8kgで平均的。(顔面所見) 正面観は左右対称であり、側面観はStraight typeであった。頭髪および眉毛は、特に薄くはなかった。

(口腔内所見) DC A|A CD が萌出して
DCBA|ABCD

おり、乳前歯部に円錐化傾向が観察された。また、DC A|A のCross biteが認められた。

DCBA|A

(X線所見) [3歳初診時] 永久歯の歯胚は上顎前歯部に2個、下顎前歯部に2個、下顎臼歯部に2個、乳歯の歯胚はE|Eを認め、その他全ての永久歯胚とEB|BEの歯胚は確認できなかった。

治療および経過：可撤式咬合誘導装置によってCross biteを改善したが、その後上顎永久前歯の正中離開を認めたため、現在その治療を行っている。今後さらに審美性および咬合機能の改善を図る予定である。

B-20

上顎両側犬歯の萌出異常に伴う中切歯の歯根吸収症例について

○谷口斉子、*是枝正彦、森主宜延、小椋 正

鹿児島大学歯学部小児歯科学講座
*是枝歯科医院(都城市)

上顎犬歯は、埋伏や異所萌出など萌出異常をきたす頻度が、他の永久歯と比較し高いと言われている。危険性は低いものの、時として上顎犬歯が、隣接する永久歯歯根の吸収を引き起こすとの報告がある。このような場合、重篤な歯根吸収が生じた隣在歯をやむなく抜歯し、異所萌出歯の誘導による対応を必要とする。今回、上顎両側犬歯の萌出異常が認められ、特に、両側中切歯歯根吸収が著しく、抜歯を余儀なくされ、犬歯の牽引誘導により良好な結果の得られた症例について報告する。

(症例)

患者：坂○理○

生年月日：1981年6月8日

初診：1994年8月31日(13歳10ヶ月)

主訴：両側犬歯の異所萌出

既往歴：特記すべき事項なし

口腔内所見：犬歯の萌出遅延、中切歯の著しい動揺あり

X線所見：3]の歯冠が2]の根尖に、[3の歯冠が[1の根尖に位置し、2|12の歯根吸収をきたしている。また3]の歯冠周囲には境界明瞭な嚢胞様透過像が認められる。

処置及び経過：1|1は歯根の吸収が著しく保存不可能と思われたため、抜歯してその部位に3|3を誘導することとした。[3は[1の抜歯後、自然に萌出してきた。3]は開窓してブラケットをセットし、リンガルアーチとエラストリックにより牽引を行った結果、歯列内に誘導されたため牽引を終了し、現在マルチブラケットによる歯の整列を行っている。今後はマルチブラケットによる治療終了後、3|3に前装鑄造冠をセットし形態修正を行う予定である。